**興福寺**

1,300年以上にわたる歴史を持つ興福寺は、日本でも大変古い、そして最も由緒ある仏教寺院のひとつである。奈良時代（710〜794年）に日本の首都であった奈良の七大寺のひとつとされた。その歴史は669年に始まる。この年、鏡王女（683年没）が、病気に苦しむ夫の藤原鎌足（614〜669年）のために祈りを捧げるために、現在の京都府に仏教寺院を建設した。この寺は673年に奈良の厩坂に移され、さらに710年に奈良が都になると現在の場所に移された。創始者である藤原不比等（659〜720年）の支援を受けたこの寺は、維摩経にちなんで興福寺（祝福を生み出す寺の意）と名前を変えた。

皇室と藤原氏の支援を受けた興福寺は急速に拡大し、藤原氏の祖神である春日大社とも融合した。大和地方において大きな政治勢力となったが、やがて衰退期を迎え、1717年には大きな火災に見舞われ、伽藍のほぼすべてが焼失した。19世紀、興福寺は中央政府の宗教政策の標的となった。やがて宗教施設として再興する許可を受け、現在も法相宗の本山としての機能を果たしている。7世紀の中国の僧によって広められた法相宗では、すべての現象は心が生み出したものであり、経験したように見えるだけである、としている。僧・玄昉（746年没）がこの教えを興福寺にもたらし、それ以降、興福寺では法相宗を布教・実践している。